

報告

第 15 回国際手外科学会（IFSSH 2025）参加報告

鳥谷部 荘八

国立病院機構仙台医療センター 形成外科

（2025 年 8 月 7 日受稿、2025 年 8 月 7 日受理、連絡先：鳥谷部 荘八・仙台医療センター）

IFSSH とは

2025 年 3 月 24 日から 28 日にかけて、米国ワシントン D.C. において第 15 回国際手外科学会（International Federation of Societies for Surgery of the Hand, IFSSH）が開催された（図 1）。本学会は 3 年に一度、世界中の手外科医が一堂に会する最大規模の国際学会であり、いわば手外科のオリンピックとも称されている。ポストコロナの今回はいつもに増して数千名に及ぶ参加者を集め、盛況のうちに開催された。日本からは全国各地の選りすぐ

ら順に席が埋まり、ほとんどの会場が満席となっていた。ほとんどのセッションが立ち見まで出ているくらいだった。質疑応答では、日本の学会のように氏名や所属を名乗る習慣はなく、聴衆は我先にと質問を投げかけた。英語が母国語でない参加者も、流暢でなくとも臆せず堂々と意見を述べており、内容の熱意こそが重視される姿勢を肌で感じる事ができた。それに引き換え日本勢のおとなしかったこと。英語が堪能ではないとはいえ、積極性を欠いたその姿勢は「日本人の奥ゆかしさ」と一言では片付けられないくらいであった。私自身を含めて。



図 1：IFSSH の医師受付
（Marriott Marquis Washington DC）

りの約 30 名の代表的な手外科医が参加し、国際舞台において多くの発表を行った。

会場は早朝から熱気に包まれていた。日本の学会とは違って、7 時半開始のセッションでも最前列か

Free style reconstruction for thumb polydactyly.

私は今回、母指多指症に対する最新の術式について ePoster 発表を行った。東北大学形成外科が長年にわたり取り組んできた先天異常研究の伝統を継承しつつ、筆者自身が臨床の中で工夫してきた術式と、その長期成績を紹介したものである。内容は以下の通りである。

母指多指症手術の概念は、端的に言えば、二本の母指から一本の美しい母指を再建することである。この再建は、いかなる型にも縛られることなく自由なスタイルで行われ、美しい母指を再建する技術を駆使して欠損組織を移植する。この自由なスタイルによる再建の概念と実践について述べた。健側と比較して不足している点を考慮し、具体的には指幅、指長、爪幅、指骨体積、指軸、指の伸展・屈曲、第一指間空間などの各部位を正確に判定し、再建に必

要な部位を整理する。その後、再建材料および必要な組織・機能を解剖学的・生理学的にフリースタイルで再構築する。単純な橈骨側母指切除で十分な症例、指幅と先端体積の確保が必要で動脈皮弁を要する症例、二分併合が必要な症例、指骨軸と第一指間の再建が必要で関節形成術および切除指からの皮弁を要する症例、指骨軸の矯正が必要で、解剖学的筋・腱再建に加えて骨切り術を要する症例、および上乘せ形成術または再配置手術を必要とする症例であった。母指多指症に対する再建手術では、解剖学的に適切な筋・腱修復が必要であるのは当然である。しかし母指を再建するには、フリースタイルで二本の母指から欠損組織を再構築する必要がある。フリースタイル再建は多指症再建における新たなアプローチと言える。(詳細は英文にするため、この場では割愛させていただく)

交流

発表の場では多くの質問をいただき、海外の研究者との間で手術デザインや適応に関する意見交換が活発に行われた。特に、世界的に著名な手外科医、いわば“スーパースター”たちから直接称賛の言葉をいただいたことは大変光栄であり、また自らの方



図 3：左から Wei Fu-chan (台湾)、L. Scott Levin (米国)、S. Toriyabe (日本) の世界 3 大マイクロサージャリー

サージャリー領域の演題は特に印象的であった。多数指切断に対する再接着術の報告では、豊富な症例経験に基づき、複数指を同時に血行再建し機能回復へ導く卓越した技術が披露された。症例数と成功率の高さに圧倒されると同時に、「箸の文化」を背景とする緻密で繊細な手技の蓄積が、この分野の飛躍につながっているのではないかと感慨を抱いた。実際、中国、日本、韓国、台湾が世界のマイクロサージャリー分野を牽引していると言ってもいい。

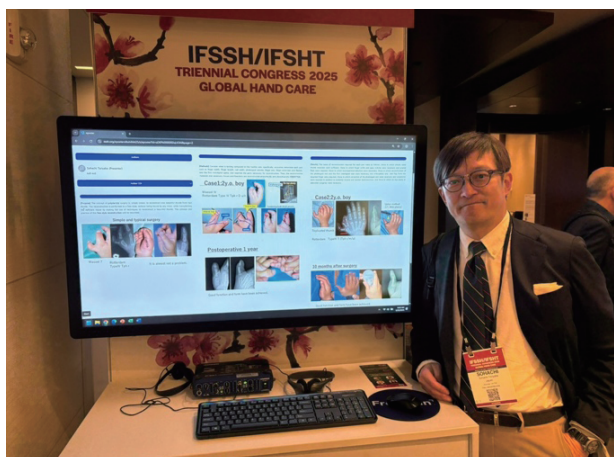


図 2：ePoster 発表時の著者

向性に確信を持つ契機となった。自分の術式に対して真剣に議論していただいたことは、この分野をさらに深めていこうとする決意を新たにするきっかけとなった。

数多くの発表の中でも、中国におけるマイクロ

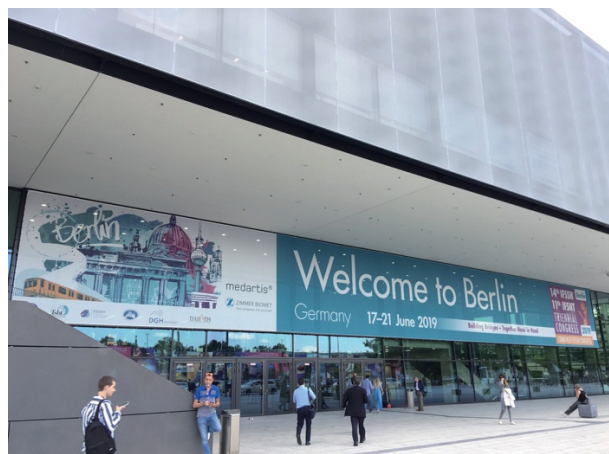


図 4：IFSSH 2019 Berlin の様子

今までの IFSSH

筆者自身、これまで第 11 回ソウル大会(2010 年)、第 14 回ベルリン大会(2019 年)でも母指多指症について発表を重ねてきた。こうした継続的な発信は、アジアにおける先天異常研究を牽引してきたとの自負につながっている。本学会は採択率が決して高くなく、発表の場に立つこと自体が手外科専門医にとって大きな夢でもある。今回、その舞台で再び発表できたことは、過去の歩みを振り返りつつ、未来への責務を改めて感じる貴重な機会であった。

ワシントン D.C. 散策

もともと、学術的刺激だけでなく、現地の生活環境にも強く印象づけられた。昨今の円安に加え、米国の物価高には大いに閉口させられた。例えば、マクドナルドのセットメニューでさえ日本円にして約 1500 円程度と、日本の倍以上の価格である。発表後の達成感と共に味わったハンバーガーは格別であったが、財布の軽さはその喜びをやや相殺した。

一方で、スミソニアン博物館をはじめとする公共施設はすべて無料で開放されており、外国人観光客



図 6：ワシントンの桜と記念塔

であっても気軽に立ち寄ることができた。その充実ぶりは圧倒的であり、芸術・歴史・科学を惜しみなく国民に提供するアメリカの懐の深さを痛感した。また地下鉄の運賃は意外なほど安価で、日常生活の基盤となる分野には手厚く予算を投じるという政治的なメリハリを強く感じさせられた。

結局、少し痩せたのは体ではなく財布であったが、心はスミソニアン展示のように満たされ、広がりを得た数日間であった。

また、ワシントンの桜を見ることができたのは、日本人として感慨深いものでもあった。

まとめ

本学会を通じて、世界の最前線で活躍する専門家との交流を深め、日本の手外科の存在感と可能性を再認識した。今後は、国際的な視点を持ちながら、自身の研究と臨床をさらに発展させ、日本の手外科の発展に寄与すべく尽力していきたい。

文献

- 1) 鳥谷部 荘八、牛尾 茂子：母指多指症 初回手



図 5：スミソニアン博物館（国立自然史博物館）

- 術における注意点. PEPARS103,1-12:2015
- 2) 三浦孝行、鳥谷部荘八他：母指多指症指尖再建における動脈皮弁の合併症とその対策. 日手会誌 38,572-575:2022
- 3) 牛尾茂子、鳥谷部荘八他：尺側指切除に内転拘縮をきたした右母指多指症の 1 例. 日形会誌 45,149-156:2025
- 4) Kosuke Kuwahara, Sohachi Toriyabe,et.al.

- On-top-plasty reconstruction for thumb triplication. JPRAS Open 38, 60–64:2023
- 5) Kazuki Shimada, Sohachi Toriyabe, et.al. A Case of VACTERL Association With Thumb Polydactyly Requiring Surgical Treatment. Journal of Hand Surgery Global Online 7 (2025) 100665